

パトグラフィ双書 10

川端康成

芸術と病理

稲村博著



著 者 略 歴

1935年 徳島県に生まれる。

1963年 東京大学医学部卒業後、同精神医学
教室に入り、同大学院を卒業。東大脳研、
東京医科歯科大学難治研などを経て、

現在 筑波大学社会医学系助教授。

専攻 精神医学、精神衛生学、自殺学、犯罪
学など。医学博士。

0391-751010-2354

〈バトグラフィ双書⑨〉

川 端 康 成

芸術と病理

定価 2,000円

昭和50年10月20日 印刷

昭和50年10月25日 発行

著 者 稲 村 博

発行者 淵 上 祐 史

印刷・高長印刷
製本・河上製本

発行所 株式会社 金剛出版

東京都文京区水道1-5-16
振替東京34848電話815-6415

©1975 By Hiroshi Inamura, Printed in Japan

＜パトグラフィ双書⑩＞

川 端 康 成

芸術と病理

稲 村 博 著

序

川端康成は、不思議な作家である。

この不思議のゆえに、ある時は奇術師と呼ばれ、またある時は無節操、如才ない世渡り、日和見などといわれ、またついには、日本美の体現者にまで祀りあげられてしまっている。

川端の不思議さは、数えあげればいくらでもある。七カ月の未熟児として出生し、とうてい育たないと考えられ、またすぐにも死にそうに見えながら、生きながらえてずい分と長寿を得た。「まはりには死屍累々」の感があり、どうしたわけか、彼がいるだけでまわりの人がみな死に急いでいく。人々の精気が、まるで彼に吸い込まれてしまうかのごとくである。「私には祭の日に会へる天運が授かつてゐる」と、自分でも語ったが、確かに、彼はいつも陽のあたるところを歩み、祭の日に会い続けた。自ら、「天才」もなく、「早成の文才」もないと語りながら、未踏の文学境地を達成し、この世的な榮譽をひとり占めにしてさえいる。また、この人のこととなると、不思議なことに誰もが批判の筆を染めようとはしない。あの戦争のさなかでさ

え、軍部の批判の外に立って、自由に振舞ったかに見える。さらに驚いたことには、彼にはなにかしら不思議な力があり、筆で「他人の運命までも支配する魔力」を発揮することができた。そればかりか、反目する人がどういふわけかみな、妙な死にかたをしていったのである。

しかしながら、最も不思議なのは彼の作品である。美しい言葉や表現の背後から、どこか冷えびえとした、得体の知れぬものが漂っており、なにやら底知れぬような妖しい影がある。一言で表現するならば、それは、魔性である。誰もがとうに気づき、表現しようとしながら、どうしてもできなかった川端の不思議は、この魔性である。魔性の人川端康成は、あの美しい文学によって、いまもなお人を魔界にいざない続ける。

この魔性とか呼びようのないものが、川端康成に著者がとくに興味を持ち、勇気を鼓舞されて、あえて本書の筆をとらせた由縁である。

川端康成の魔性は、いわゆるデーモンではない。デーモンの例はほかにいくらかもあるが、魔性となると、容易に見られるものではない。魔性は、ひっそりと静かで、目立たない。あくまでも繊細な美しさを特徴とし、魅惑に満ちている。無気味であっても怪奇ではなく、妖気であって神秘ではない。

そういうえば、この作家ほど魔という言葉を用いた人はめずらしい。ことに、「仏界易入、魔界難入」という言葉を好んだ。彼はこれを盛んに揮毫したばかりか、作品のなかに何度も用いた。

例えば、『舞姫』である。この作品には、おそらく康成が描き出した最も厭な人物と思われる男矢木が登場するが、彼は自室の床の間に、もっともらしくこの掛軸を飾っているのである。また、最晩年の作品『たんぼぼ』にも、これが現われる。丘の上の、寺でもあり、精神病院でもあるという妙な建物のなかに、「病院の主のやうな西山老人」がいて、「本堂の畳に紙をひろげ」ては、朝から晩までこの八文字を書いている。

こうした魔的な世界は、この作家がことに好み、勞せずして得られたなじみの深いものであった。

さて本書では、川端康成について、もっぱらその魔性に焦点を合わせながら、病蹟学の枠にこだわらず、いくつかの角度から論じることとする。根拠とする資料は主として彼自身が書いた作品である。作品のなかにこそ、彼が己を書き尽くしているからにほかならない。それ以外には、多くの人の手になる論評を参考にさせていただいた。

目次

序

一 死の主題……………	二
二 かなしい女の主題……………	六
三 超時空の主題……………	一九
1 超能力に関するもの……………	三〇
2 霊的世界……………	三七
3 幻想の世界……………	一五
4 夢……………	一七
四 川端康成と宗教……………	二五
五 精神医学的考察……………	二五

六	川端康成と自殺	三六
1	日本の自殺作家	三六
2	川端康成の自殺	三九
七	魔性の人・川端康成	三七
	あとがき	三七
	参考文献	三七
	索引	三六

川
端
康
成

一 死の主題

川端康成の把握にあたって、最初の手がかりとなるのは、彼の死観である。それは、独自の内容によって康成の持つさまざまな特徴のうち最も顕著なものとなっている。本章では、これを死の主題と呼びながら考察する。

(一)

川端康成の作品には、ほとんど例外がないといえるほどに、死が語られている。

そのうち、死が主な、ないしは重要なテーマとなっている作品を選んで、年次順に並べると次のごとくである。

『十六歳の日記』『骨拾ひ』『ちよ』『油』『葬式の名人』『金糸雀』『白い花』『青い海黒い海』『白い満月』『死顔の出来事』『心中』『龍宮の乙姫』『霊柩車』『祖母』『屋上の金魚』『処女作の祟り』『女』『神の骨』『金銭の道』『母国語の祈禱』『女を殺す女』『死者の書』『死体紹介』

人』『死体の復讐』『鬼熊の死と踊子』『顕微鏡的怪談』『通夜人足』『騎士の死』『雪隠成仏』『父母への手紙』『抒情歌』『慰霊歌』『死面』『化粧』『それを見た人達』『化粧と口笛』『二十歳』『禽獣』『散りぬるを』『末期の眼』『秋風の女房』『妹の着物』『虹』『田舎芝居』『イタリアの歌』『夕映少女』『生花』『愛』『金塊』『故人の園』『女の夢』『寒風』『さくろ』『冬の曲』『ささん花』『五十銭銀貨』『足袋』『瀧』『地獄』『たまゆら』『水月』『離合』『船遊女』『不死』などである。

これらの創作のほかに、死者への弔辞や、あるいは死者への想いを語った作品も、康成の生涯を通じて数多くみられる。

『池谷信三郎』『直木三十五と碁』『十一谷義三郎』『北条民雄』『岡本かの子』『片岡鉄兵の死』『島木健作追悼』『武田麟太郎と島木健作』『横光利一弔辞』『芥川龍之介と菊池寛』『山本有三、豊島与志雄、久米正雄』『林芙美子さんの手紙』『古賀春江と私』、永井荷風への『遠く仰いで来た詩人』と『永井荷風の死』、『青野さんのこと』『徳田秋声「爛」あとがき』、尾崎士郎への『献詞』および『人間随筆』、『高見順』『伊藤整』『三島由紀夫』、それに『志賀直哉』などがそれである。

また、長篇においても、多少意味あいは異なるが、死が重要な役割を果たしているものがやはり少なくない。

『雪国』『千羽鶴』『虹いくたび』『名人』『日も月も』『川のある下町の話』『眠れる美女』『美しさと哀しみと』などはみなそれに数えられるであろう。

こうした死の作品のおびただしさが、なによりも、まずこの作家の特徴をよく示している。

(二)

そこでまず、死が主なテーマとなっている作品について、おのおの死の内容を順にざっと見ておこう。繁雑ではあるが、康成の死観を知るうえで、なによりも不可欠だからである。

康成が最も早く書いた作品『十六歳の日記』（大正三年、同十四年発表）が、そもそも死のために書かれたものである。処女作が生涯を導く作家の運命を思うとき、実に示唆的なことといわざるをえない。

当時十六歳（満年齢では十四歳）であった康成は、他の肉親にはとうに死に別れて、たった一人残された母方祖父と二人きりで住んでいた。その祖父も、今ではすっかり老いさらばえて、目も見えず、体もきかず、そのうえ頭もぼやけて、死の影がしのび寄っている。

少年康成は、今にも「祖父が死にさうに思へるからこそ、せめてその面影を……写して置きたいと思つて」、この日記を書いた。彼は祖父の寝ている前に机を出し、祖父が目の見えぬのを幸いに、原稿用紙を拡げて、祖父の「呆けた蒼白な顔」を、「自分の眼がぼうつとなるまで」

じつと見つめながら、「ぎこちない正確さ」の強い迫力をもって、一心に筆を走らせている。その前では、老人は苦しがり、わけのわからぬことをいい、まるで老いた動物的生理そのものようになってしまっている。

古い旧家の、うす暗い部屋のなかにおけるこの二人の姿、ことに少年の姿には、どこかうすら寒いものを感じさせられる。しかもこの姿こそが、十四歳の日から七十二歳までの生涯に貫かれた、この作家の暗示的な姿だったともいえる。

二年後に書かれた『骨拾ひ』（大正五年）になると、この祖父が死んで、火葬場で骨を拾った時の情景が描かれている。

少年は、「死んではなにもない。忘れられてゆく生。」と、一方では考えながら、他方では、祖父が「青い焰の人玉となつて、神社の屋根から飛び立ち、避病院の部屋を流れ、村の空にいやな臭ひを漂はせて行つた」という噂に、じつと耳を傾けているのである。

発表年次順では処女作である『ちよ』（大正八年）も、死が中心になっている。

これは、祖父が金を借りていた「田中千代松」という男の死霊に祟られる話である。「私」は、千代松の祟りで、「ちよ」という名のつく女たちに、どこまでもつきまとわれ、囲まれてしまう。この作品では、死霊の祟りという内容を多少のこっけいで粉飾しながらも、至極真面目で真剣に描いているのが注目をひく。

なお、『ちよ』には因縁めいた後日談がある。『処女作の祟り』（昭和二年）という追記の作品がそれである。

『ちよ』で千代松としたモデルは、「堀山岩男」という男であったとある。『ちよ』を書いた当時には、この男は実はまだ生きていた。それを康成は、『ちよ』のなかで病死させ、祟らせさえたのであった。ところが驚いたことに、『ちよ』が一高の校友会誌に発表されて一週間ほど経ったとき、康成を愕然とさせる事件が起こった。岩男が「発狂して女房と息子を斬り殺し、自分は納屋で首つりして死んだ。」のである。学校の図書館で偶然この事件を新聞で読んだとき、康成は色を失ってしまった。

『ちよ』で千代松を死なせたからといって、康成はその男に決して恨みがあつたわけではない。祖父へ貸した金を取り戻せなくなると心配して、中学の寮にまで証文を書かせるためにやって来た気の毒な男と思っただけである。作品で死なせたのは、文学的変形に過ぎなかったと彼は弁解する。

しかしながら、筆のうえで死なせた男が、現実には妙な符合で死に、しかも発狂して妻や子まで殺したという事実を前にして、康成は「宿命論者じみた神秘主義者」になったのだと語る。

これがおそらくは、彼が自分の持つ不思議な力と、筆力に対する自覚の第一歩をなした出来事であろう。似たようなことは、筆によるものではないが、康成にはほかにいくつも例がある